

文化の違い、体に染み込んだ感覚の違い、公演に対する感想が今回ついにここまでたどり着いた。開き直りのような感想だが、ここに至るまで1997年のエジンバラから始まった海外フェスティバル参加公演から足掛け13年、合計15回の参加公演が必要だったということだろうか。今まで自分を含めた日本人の公演を、内容が薄い、あっさりし過ぎ、物まね風、にしたのは修行の足りなさ、鎖国で守られた日本人の甘さ、日本人の海外への強いあこがれ等のせいと考えてきた。しかし、今回あっさりした日本人の公演を単純に否とすることはできないことにつくづく気付かされた。フランス人のあまりに密度が濃くて辟易とする公演にいくつかぶつかったせいでもある。もうやめて欲しい、ここまでにしてくれたらどんなに後味がいいことか、しかし、公演は延々と続く。終了後、時計を見て驚いた。えっ、これってやっぱり1時間少し？ここフェスティバルではほとんどの公演が1時間で終わる。なぜなら劇場を、準備、片付けも含めて1時間半か2時間借りているだけなのだ。そしてひとつの劇場で朝11時頃から夜12時頃まで大体1日5~7公演が入る。

1時間であの濃密さ。あるお笑い系の公演では、神経質な妻と、彼女に振り回される夫のやり取りが延々と続く。彼らの家では靴にカバーを付ける決まりがあるらしい。妻のカバーはスリッパ状であるが、夫のはただの足底型の布である。うまくすべらせて歩かないとすぐに靴からはずれ、と妻は怒り出す。そんなおかしいやり取りから始まり、食卓で楽しく語りた妻と新聞を読みたい夫のすれ違い、妻が編みかけている編み物がほぐれ、からまり、上の階の住人が怒り出し天井がはがれ、家中がこわれ、と延々とありそうでありえないきわどい夫婦の戦いが続く。10秒に1回出来事が起こったとすると、単純に計算しても1時間で360もの事が起こったことになる。最初は楽しく笑っていたが、だんだん飽きてきて、もう終わりにして欲しいと、疲れた体が叫び出す。何度も終わっていい区切り、シーンがあったのに。これだけのやり取りをあうんの呼吸でつなげるには、何年も掛かるだろう。スタッフ達とアイデアを出し合い、試行錯誤で作上げた舞台であることは十分わかる。この公演が売れなければ、スタッフともども路頭に迷ってしまうのだろう、その必死さがかえって私を疲れさせてしまう。この料金でこれは安いと思わせなければならぬのだろうか。

この公演のようにマスコミの評判も良く、お客様も大勢集まる公演でも、私にはやり過ぎとしか思えないものがいくつかあり、もうこれは文化の違い、感覚の違いとするしかなくなってしまった。感動し、いいものを見たとする満足度は、遺伝子、脳等の無意識の感覚が判断しているのではないかと、思えてきた。ベルサイユ宮殿の豪華絢爛が彼らの遺伝子にとじこめられており、法隆寺の荘厳さ、緊張感が我々の感性の源である。すり足で出てきて打掛を脱ぐ、そんな何気ない動作も、我々の文化は絵にしてしまう。フェスティバル主催のダンス公演でも、10人の若者が一人ひとり出てきて、服を脱ぐ。が、それはだらっとした、ただの日常行為を見せているに過ぎない、緊張感もなく絵にもならない。こんなものに5分の時間を使わないで欲しい、そんな、日常動作の時間が2時間公演の半分もあり、しかも公演の終わりにもそれぞれが服を身に付けるのに5分使うのだ。そして10人目の人が退場するとブラボーの嵐だ。わからない、どうしてもわからない。これはもう体にしみついた文化、感覚としか判断のしようがない。彼らはスピード感があり、大胆でさ

まざまなことをし、空間内要を次々と変化させることに心血を注ぎ、途中の緊張感の緩みなど全く気にしない。大胆さには欠けても、我々の文化は空間を緊張させ、全ての時間を掌握することに細心の注意を払う。目的がまるで違うのだ。すっきりとした中で体の緩みを許さず静止して自分を見つめる禅のような精神が我々の中には確かにある。

映像とダンスの融合の台湾の公演を見た。真っ白い大きなパネルが舞台にしつらえてあり、静かに一人の女性がその前で踊りだす。そのパネルは3つに区切られ、一つ一つの前で彼女は踊る、その踊る映像がリアルタイムで踊る左右に流される。最後に彼女は去り、3つの過去の映像だけが残る。ダンスは少なく、もっと見たかったという物足りなさが残る。しかし後から、その公演が頭に強く印象付けられていることを発見する。全てが美しかったと思う。計算されていないところはどこにもなかった。すべての時間が計算づくであった。これがわれわれの文化だと思った。体がゆるまないためにすり足で歩き、足先から手先まで体全体を緊張させるために腰を落とす訓練をする。

何年も修行をしながらそれぞれが創り上げるオリジナル公演が1000もあるここアヴィニオンフェスティバル。自分の公演をやりながら40近い公演を見終わった時、無意識にそれぞれが引き継いでいるものが、終演後にふと浮かび上がることへの感動を覚えた。同じ時間軸を生きる人間でも文化が違ふとこんなに印象の違うものをつくるのだろうか。創作途中、これでいこうと決断すること、それはその人の経験だけではなく、その人に蓄積された何かがあるように思っている。我々は、途方もなく長い時間軸のほんの一瞬を生きているに過ぎない。その肉体には、確かに遠い過去から受け継いだ血が流れ、無意識の判断の中に祖先が築いてきたものが現れる。そして自分が判断したものが確実に次の世代に引き継がれる。自分が今していることが、自分だけでは終わらず、次の世代の判断につながっていく。もっと自分が受け継いでいる感覚に自信を持っていい。

欧米文化が氾濫するこの日本の現代社会において、我々に流れている何千年の歴史を含んだ血潮をもう一度考えてみる必要を感じた今年のアヴィニオン公演であった。

ラ・プロバンスに掲載された記事を読んで、自分達が目指しているものをきちんと受け取ってくれるフランス人記者がいたことに感銘を受け、深く感謝した。

花柳衛菊 アヴィニオン パブリックオブ参加公演 プログラム

7月17日～30日 14回公演

静かなる女達の愛の叫び

① 虞美人草 I (夏目漱石 原作)

小野さんからの手紙 衛菊

彼はいったい何を言っているの？

② 女達の愛の叫び

櫓のお七(古典) 裕紀

シャンソン

ろくでなし 衛菊

ラストダンスは私に(裕紀振付) 裕紀

サントワマミー 衛菊

③ 虞美人草 II

私が小野さんのフィアンセです 衛菊、裕紀

いいえ 私がフィアンセです

振付： 花柳衛菊 演：花柳衛菊、泉 裕紀